

弥生時代のガラス釧とその副葬

小寺 智津子

要旨 弥生社会ではガラス製品は装飾品としての用途以上に、政治的意味合いを伴う威儀品として使用されたため、その研究は弥生社会の分析へとつながるものである。一方ガラス素材は基本的に全て搬入品であり、当時アジアにおいて奢侈品として広く流通していたものであった。ガラスは当時の国際的な交流についての手掛かりを与えてくれる遺物でもある。本稿では弥生時代のガラス製品の中でガラス釧を取り上げて詳細な検討を行った。まず出土した釧を各々細かく観察した後、西谷タイプと南大風呂タイプの大きく2タイプに分けた。さらに製作地を検討するために弥生時代の銅釧と比較を行い、国内でその形状の系譜を追うことが可能かを考察した。結果どちらのタイプも国内における系譜は存在せず、搬入品であることが明確となった。次に釧を出土した各墳墓の特徴や釧の出土状況などを検討し、副葬品としてのガラス釧の入手経路やその副葬された背景を考察した。結果それぞれの地域の中で、独自の価値を持って副葬された状況が垣間見えるものとなった。特に出雲・丹後地域のガラス釧が副葬された首長の傑出性が高く、当該地域におけるガラス釧の威儀品としての重要性の高さや、各首長が独自に列島外から入手した可能性が推測された。また西谷タイプのガラス釧は釧として副葬された状況が伺える一方で、大風呂南の釧は中国の「佩玉」的な意図をもって副葬された可能性が浮上り、丹後地域の独自性、大陸との関係性の深さがより抽出される結果となった。今後の課題はこれらのガラス釧の製作地と古代アジアにおける流通経路の検討である。

1. 研究目的

日本でガラス製品が出土するのは弥生時代以降である。前期末にごく少量が北部九州を中心に出土しており、弥生時代中期になるとその数量が増加する。後期になるとさらに数量が増加し、また出土する地域も広範囲にわたる。その大半は墳墓から副葬品として出土している。

弥生社会において、ガラス製品は首長層の間で単なる貴重な奢侈品や装飾品としての用途以上に、高度な政治的な意味合いを伴う威儀品として使用されており、その使用や分配の分析はまた、それら社会の分析へとつながるものである¹。さらにこれらガラス製品は基本的に全て搬入品であり²、当時弥生社会はアジア地域におけるガラス交易の最終消費地であった。当時のアジアにおいて、地域を越えて様々な製品が広く流通していたと考えられるが、長い時間を超えて残存するものは少ない。その中で金属製品の研究は多く見られるが、ガラス製品の研究はあまり行われていなかった。しかしガラスは奢侈品として広く交易されており、弥生だけでなくアジア各地域の墳墓に副葬品として残るために、当時の交易や社会を物語る雄弁な遺物として非常に興味深い遺物である。

本論文ではこれら弥生時代のガラス製品の中で釧をとりあげる。近年山陰・丹後の墳丘墓で2件の出土例があり、数はすくないものの重要な首長墓から出土し、その重要性が非常に高い遺物であるが、現在それらを総合的に検討比較した研究はなされていない。1点1点詳細に検討し、製作技法や製作地、またそれらを副葬した社会背景などについて考察したい。

2. 研究史

弥生時代のガラス釧に関する研究はあまり行われていない。藤田（1994）は二塚甕棺出土のガラス釧を検討している。この釧について楽浪銅釧との関連性を推定し、舶載されたガラスを使用した国内における鑄造である、と製作技法を推定している³。さらに続けて、他地域の類例を挙げている。それによると朝鮮半島において原三国以前の出土例はなく、中国でガラス釧として2例が報告されている事を述べている。

化学的見地からは山崎（1987）が二塚甕棺出土のガラス釧を分析し、見解を述べている。このガラス釧は鉛同位対比の分析が行われており、弥生時代に良く見られる中国産の鉛バリウムガラスとも、日本産の方鉛鉱とも異なっていると指摘している。また大風呂南墳墓出土（岩滝町教育委員会 2000）、西谷2号墓（島根県出雲市教育委員会 2006）出土のガラス釧は成分分析が行われており、報告されている。

3. 日本国内で出土した弥生時代のガラス釧の検討

弥生時代のガラス製腕輪は現在まで4遺跡から出土している。すべて後期の墳墓であり、筑前の二塚遺跡甕棺墓、出雲の西谷2号墓、丹後の大風呂南1号墓・比丘尼屋敷墳墓である。以下、ガラス釧を詳細に検討する。

①二塚遺跡甕棺墓出土ガラス釧（図1）

後期後葉に比定される甕棺より出土した。破片が22点あるが接合は出来ない。推定される径の違いから2点分と考えられている（伊都歴史資料館 1998、藤田 1994）。

藤田氏によると、計測可能な破片は図1-1～3で、図1-1・2の外径が8.0cm内外、図1-3の外径が6.5cm内外であり、その他の破片と照らし合わせても、大小2個体あると考えている。

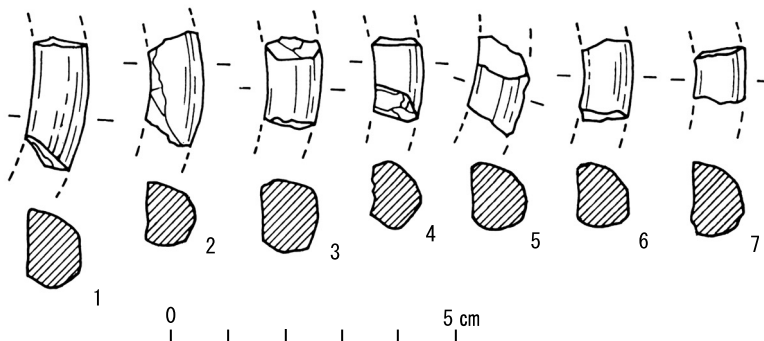


図1 二塚遺跡甕棺出土ガラス釧

これには異論は無く、外径が 8.0cm 内外の個体の法量は、推定内径 6.0cm 前後、身幅 0.9 ～ 1.0cm、厚さ 1.2 ～ 1.4cm である。外径が 6.5cm 内外の個体の法量は、推定内径 4.5cm 前後、身幅 1.0cm、厚さは 1.2cm である（藤田 1994）。遺物を観察したところ、内径にはやや傾きがあるようにも思われる。

いずれもややいびつな円形を呈すると考えられ、断面形は D 形である。表面には朱が付着している。また風化がひどく完全に白色化しており、本来の色調を判断するに困難である。しかし破損箇所では透明度のある緑色を極わずかに覗かせており、本来は透明度の高い緑色を呈していたと考えられる。

化学組成は分析によるとバリウムを含まない鉛珪酸塩ガラス（いわゆる鉛ガラス）で、鉛の含有量は 70.8% と高鉛である。鉛同位体の分析も行われており、鉛同位体比は弥生時代に良く見られる中国産の鉛バリウムガラスとも、日本産の方鉛鉱とも異なっていると指摘されている（山崎 1987）。

断面の観察によると、細かな気泡が多量に存在している。風化のため表面からの気泡の形状は観察できなかった。また風化により遺存状態が悪いため、製作技法の観察は出来なかった。なお藤田（1994）は二塚甕棺墓のガラス釧を、楽浪系銅釧の形態に基づいて、舶載されたガラスを使用して列島内で片面鋳型による改鋳で製作されたものであろうと推定している。

②西谷 2 号墓出土ガラス釧（図 2 - 1 ～ 4）

西谷 2 号墓は後期後葉に比定され、中心主体に伴う遺物と考えられている（島根県出雲市教育委員会 2006）。合計で腕輪 4 点分と考えられている。

図 2 - 1 はほぼ完形で出土した。外径 6.8 ～ 7.0cm、内径 5.8 ～ 6.0cm。内径に天地では 0.2cm 程度の差が見られた。身幅 0.4 ～ 0.7cm、厚さ 0.6 ～ 0.9cm。ほぼ完形であり、このタイプのガラス釧では完形に近い状態のものは初めての出土である。

図 2 - 2 は三分の二ほどが残存している。外径約 6.8cm、内径約 5.7 ～ 5.8cm。身幅 0.4 ～ 0.5cm、厚さ 0.6 ～ 0.8cm。天地で内径に少し差が観察された。

図 2 - 3 は約半分ほどが残存している。外径が約 6.8cm、内径約 6.0cm。身幅約 0.3cm、厚さ 0.4 ～ 0.6cm

図 2 - 4 は、風化がひどい状態である。図 3 - 3 の個体と同一個体の可能性もある。身幅 0.45cm、厚さ 0.7cm

各個体ともややいびつな円形を呈し、断面形は D 形である⁴。全体的に風化が激しく、剥落が著しい。一個体の中で幅や厚みが非常に薄い部分があるが、風化により浸食されたためと考えられ、本来は幅や厚みが一定であった可能性も高い。これら 4 点のガラス釧は法量に多少の大小はあるが、基本的に形状を等しくした規格的なものであったと考えてよいだろう。またいずれも内径の断面がやや傾き、上下で内径に差が見られる点は重要である。

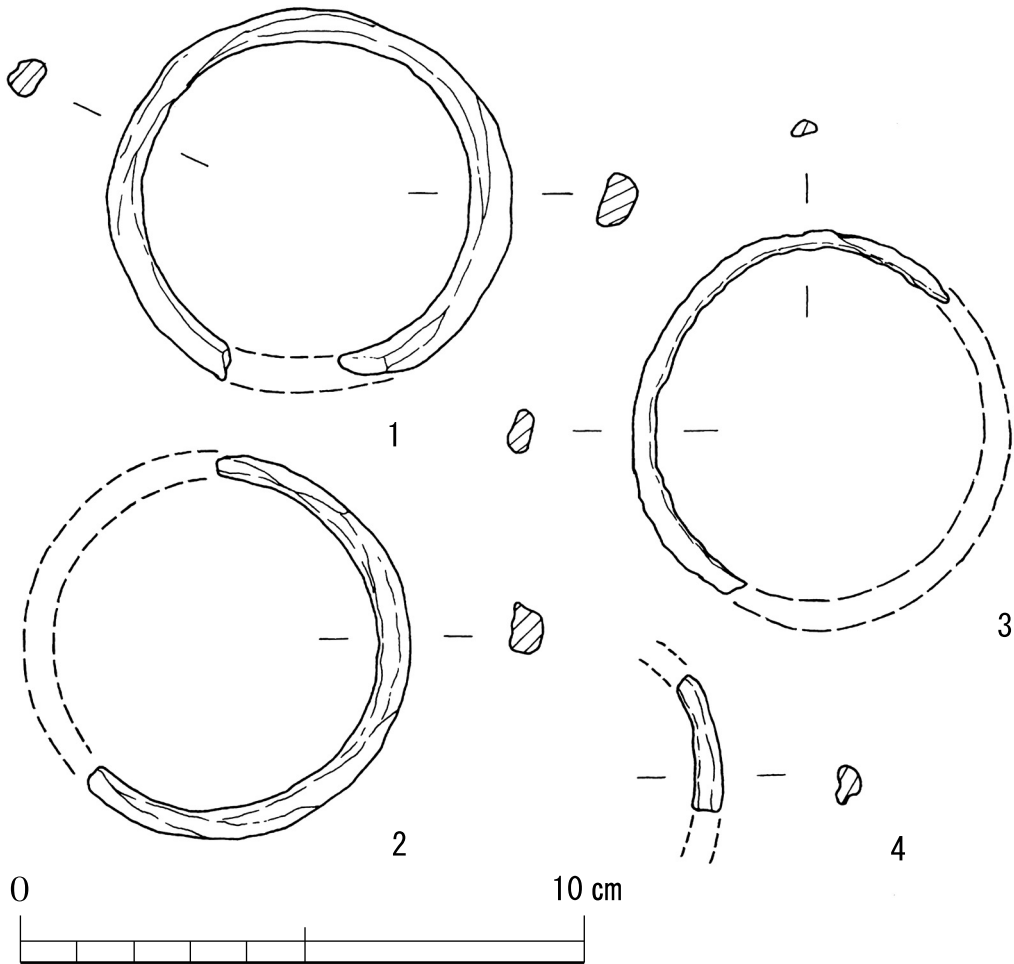


図2 西谷2号墓出土ガラス釧

色調は風化により白色化しているが緑色を残している。断面は特に透明性を残しており、透明度は本来高かったと考えられる。断面の観察によると気泡は非常に多い。外面にも内面にも筋状の痕跡が見られる。これらの特徴は4点とも共通している。また図2-2のガラス釧は外面に接合したような痕跡を残している（写真1・2）。化学分析によると、組成はバリウムを含まない鉛ガラスで、鉛の含有量は71.8%と高鉛である（島根県出雲市教育委員会 2006）。鉛同位体の測定は行われていない。

西谷2号墓出土のガラス釧は残存状態が良く、製作技法が観察できる。外面・内面ともに引き伸ばしたと考えられる筋状の痕跡が観察され（写真3）、そして特に注目すべきは接合痕と思われる痕跡が明瞭に観察される点である（写真1・2）。これは埴塙からガラス種を引き伸ばして取り出し、その後端部を接着して円形を作り出したときの接合痕と考えられる。すなわち、このガラス釧は巻き付け技法による製作が想定される。



写真1



写真2

巻き付け技法はガラス種を引き伸ばし、円形の筒などに巻きつけて端部を接着し形状を整えることにより、ガラスの腕輪を製作する技法である⁵。ガラスの腕輪を作る一般的な技法のひとつであり、古代から現代まで使用されている技法である。製作時にガラス種を巻きつける円形の筒型は、上下にやや傾斜をつけると抜き取りやすい⁶。ガラス釧の内径の断面がやや傾いており、上面・下面の内径が微妙に異なる点は、やや傾斜した筒型を使用したことを示しており、巻き付け技法によって製作された傍証である。



写真3

③大風呂南1号墓出土釧（図3）

後期後葉に比定される1号墓第1主体の棺内から出土した。点数は1点で完形。

外形は整った円形を呈す。上下に面取りがある点が特徴的で、断面形は五角形となる。法量は外径9.7cm、内径5.8cm、身幅3.9cm、厚さ1.8cmである。内径の天地の差は見られない。

土中であつたが風化をほとんど受けていない状態で出土しており、色調は青色、透明度は非常に高く、内部の状態がよく観察できる。内部には気泡がかなり存在しており、一部伸びた状態のものが観察される。また表面には円形の小さな凹みが観察され、鑄造時に気泡が抜けた痕跡と考えられる。

化学分析によると、組成はアルカリ珪酸塩系カリガラスの低マグネシアタイプで、着色因子は明

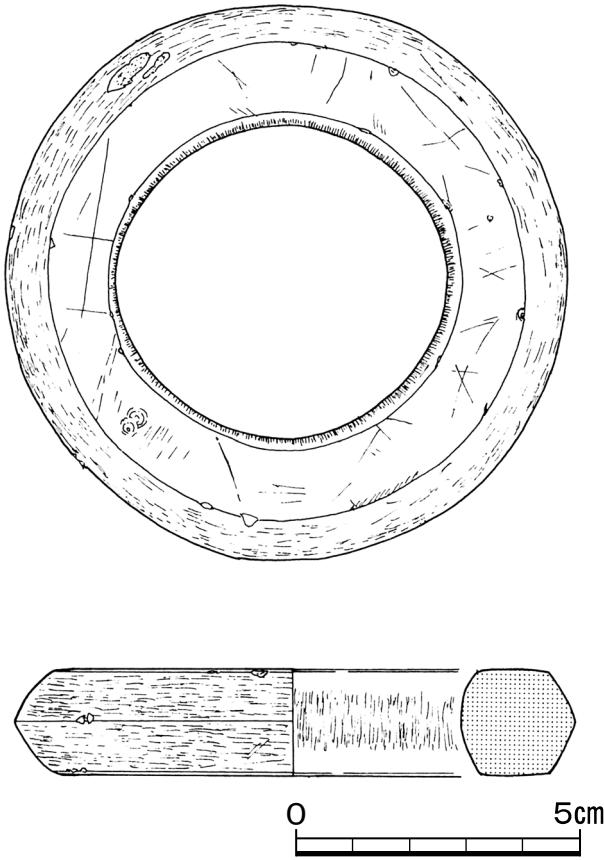


図3 大風呂南1号墓出土ガラス釧



写真4

らかではないが、コバルトまたは鉄と考えられる(岩滝町教育委員会 2000・肥塚 2009)。

製作技法を鑑みると、一部やや伸びた状態の気泡から、製作時にガラス種を引き伸ばしたことがわかる(写真4)。しかし接続痕がないこと、形態の均整がとれておりかつ径・幅・厚さが一定であること、その重量などを鑑みると、両面鋳型にやや伸ばしたガラス種を入れ込んで鋳造したと考えられる。仕上げは非常に丁寧であり、表面は滑らかに研磨されている。

④比丘尼屋敷墳墓出土ガラス釧

以前は古墳時代とされていたが、現在は弥生時代後期後葉と考えられている。点数は1点で、全体の約半分近くが遺存している。

外形はややいびつな円形を呈し、断面形はD形である。法量は外径約7.2cm、内径約6.0cm、身幅約0.6cm、厚さ約1.0cm。風化がひどく、剥落も激しい。しかし断面には透明度のある緑色が観察でき、本来の色調は透明度の高い緑色であったと考えられる。風化のため気泡の状態は観察できない。また成分分析はされていない。

外面中央には接続したような痕跡が観察された。これは西谷2号墓出土の釧と同様な痕跡と思われ、巻き付け技法による製作の可能性が高い。

4. ガラス釦のタイプ分類

以上、弥生時代のガラス釦を検討してきた。表1はこれら遺物の特徴をまとめたものである。法量・側面形・組成・製作技法などから、大きく2タイプに分けることが出来る。

表1 弥生時代の遺跡から出土したガラス釦

地域	遺跡名	時代	点数	法量 (cm)				断面形	色調	組成
				外径	内径	身幅	厚さ			
筑前	二塚遺跡 甕棺墓	後期後葉	2	約 8.0	約 6.0	0.9 ~ 1.0	1.2 ~ 1.4	D形	緑色。風化により表面は白色化	鉛ガラス
				約 6.5	約 4.5	約 1.0	約 1.2	D形		
出雲	西谷2号墓	後期後葉	4	6.8 ~ 7	5.8 ~ 6.0	0.4 ~ 0.7	0.6 ~ 1.0	D形	緑色。風化により表面は白色化	鉛ガラス (バリウム含まず)
				約 6.8	5.7 ~ 5.8	0.4 ~ 0.5	0.6 ~ 0.8	D形		
				約 6.8	約 6.0	約 0.3	0.4 ~ 0.6	D形		
				—	—	0.45	0.7	?		
丹後	大風呂南 1号墓	後期後葉	1	9.7	5.8	3.9	1.8	五角形	青色・透明	カリガラス (低マグネシア)
	比丘尼屋敷 墳墓	後期	1	約 7.2	約 6.0	約 0.6	約 1.0	D形	緑色。風化により表面は白色化	不明(分析なし)

①西谷タイプ

二塚遺跡甕棺墓、西谷2号墓、比丘尼屋敷墳墓出土のガラス釦は、その形態・側面形・法量・色調とも共通性が見られる。

形態はややいびつな円形を呈し、側面の断面形はD形である。法量にはやや大小があるものの、近似値を示す。出土後の状態で、外径で6.5~8.0cm、内径で4.5~6.0cmである。鉛珪酸塩ガラスは酸性土壌中では風化しやすく、特に西谷2号墓の遺物は風化が進んでいる。このため特に幅や厚さに関しては風化による侵食を考慮に入れねばならない。甕棺内部から出土し、風化による浸食の程度が少ないと考えられる二塚遺跡の釦を中心に鑑みると、本来の厚さは0.6~1.4cm程度、身幅0.5~1.0cm程度くらいかと思われる。表面の風化がひどいが、各々の断面の観察などから本来の色調は透明度の高い緑色と考えられる。

成分分析は二塚遺跡と西谷2号墓の遺物がなされており、その組成はバリウムを含まない鉛珪酸塩ガラスで、鉛の含有量が70%強と高鉛である。

製作技法は西谷2号墓の遺物の観察によると、巻き付け技法が推定される。また比丘尼屋敷墳墓の遺物も痕跡より巻き付け技法による製作の可能性が高い。二塚甕棺墓の遺物もこれまで鑄造による製作が想定されていたが(藤田1994)、その形状や組成の特徴が同一である点、内径にやや傾きが観察される点などから、同様の製作が想定される。

以上から、これらの腕輪が緑色の鉛ガラスを用いて巻き付け技法によって製作された同タイプのものである、と考えると問題は無いだろう。これを西谷タイプとしたい。成分が非常に近い点、法量に大きな差異が無いなどの特徴を鑑みると、製作地を同じくし、時期的に大きな隔たり無く作られた可能性は高いと考えられる。

②大風呂南タイプ

大風呂南1号墓から出土したガラス釧は、上述した3遺跡の例とその特徴を大きく異にする。形態は整った円形を呈し、側面の断面形は五角形である。法量は西谷タイプに比べると外径・身幅・厚さともに大きく、上下の面とり幅が広いのも特徴的である。色調は透明度の高い青色を呈し、成分分析がアルカリ珪酸塩ガラス系のカリガラス（低マグネシアタイプ）で、製作技法は両面鋳型による鋳造と考えられる。

法量・断面形・色調・組成・製作技法とすべて西谷タイプと異なっており、1点のみの出土であるが、これを大風呂南タイプとする。

以上より、弥生時代の日本に搬入されたガラス釧は、異なる特徴を持つ少なくとも2タイプに分けることが出来る。この2タイプは、製作地を異にする可能性が高い。

5. 弥生時代の釧の系譜とガラス釧の関係

次にこれらガラス釧がどこで作られたか、すなわち列島内で作られたか、または搬入品であるかという製作地の問題をとりあげたい。まず弥生時代後期までのガラス製以外の釧の変遷から、他素材の釧からガラス釧へという変化の可能性はあるか、すなわち列島内で系譜を追うことが可能であるか否かを検討したい。

弥生時代に見られる主な腕輪は貝製・銅製・鉄製品・ガラス製品等である。この弥生時代の釧のなかで最も特徴的なものは、ゴホウラ・イモガイ等の南海産大型巻貝製の腕輪であろう。これら南海産大型巻貝製の腕輪は突起など貝の特徴をいかして製作しており、その形状がまた重要であったと考えられている。この形態は青銅製腕輪や玉製腕輪に写され、古墳時代に継承されるものとなる。しかし逆にこの形態の特徴性から、ガラス釧と直接的な形態的關係は無いと考えてよいだろう。一方、青銅製腕輪には、円形のものや南海産巻貝製貝輪の形を写したものがあり、系譜を異にする。上述したように南海産巻貝製貝輪の形を写したタイプについては検討対象から外して問題ないと考えられるため、注目すべきは円形のタイプである。

1) 円環形銅釧の形態とその系譜の問題

青銅製円形腕輪には円環形を呈すものと、薄板状の帯形を呈すものがある。円環形銅釧は楽浪系銅釧ともいわれるもので⁷、北部九州を中心に西日本に分布し、帯形銅釧は後期から終末期にかけ

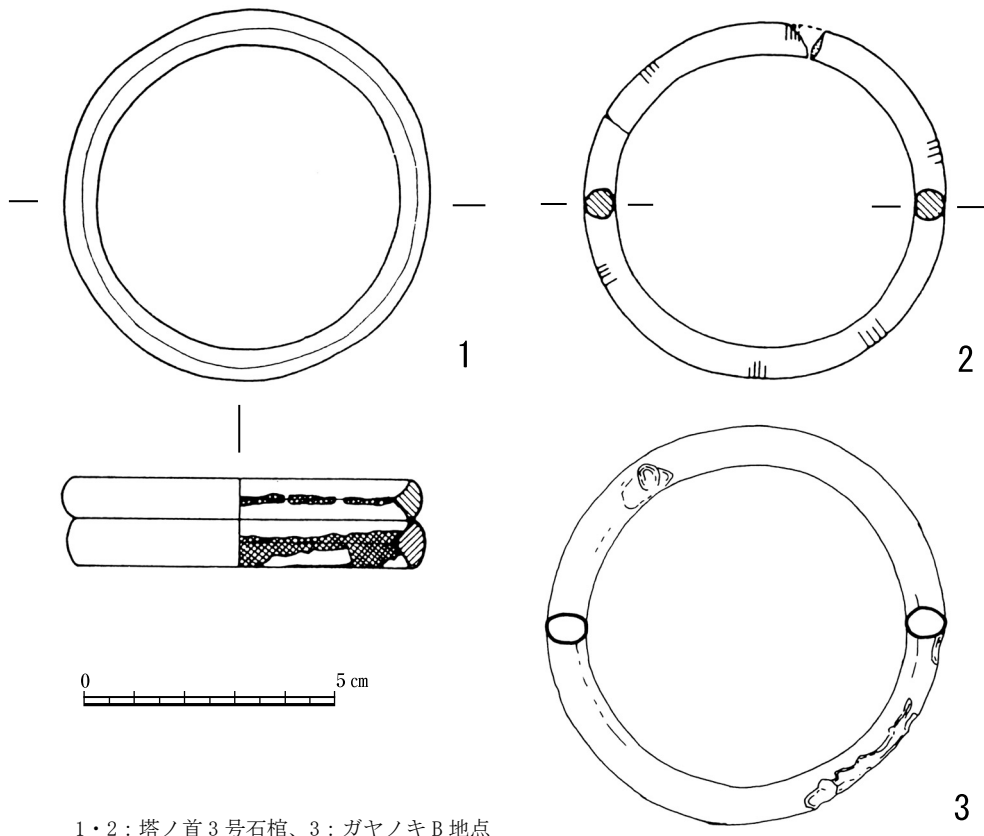
て中部地方から東日本に分布する。また鉄製腕輪も同じく後期に見られ、こちらは円環形と螺旋形があり、帯形銅製腕輪とほぼ同じ地域に分布している（北條 2005）。

これら弥生時代の釧の形態を鑑みると、大風呂南タイプと同様の形態を持つ腕輪は存在せず、大風呂南タイプは弥生釧の系譜から逸脱した存在であることが明白である。一方西谷タイプとその形態が似ている釧として、円環形銅釧が祖上へのぼろう。

円環形銅釧は前期末～中期初頭に登場し、出現初期には北部九州に集中しているが、中期には近畿地方まで分布を広げている。しかし後期になると出土例は減少し、対馬に集中する。

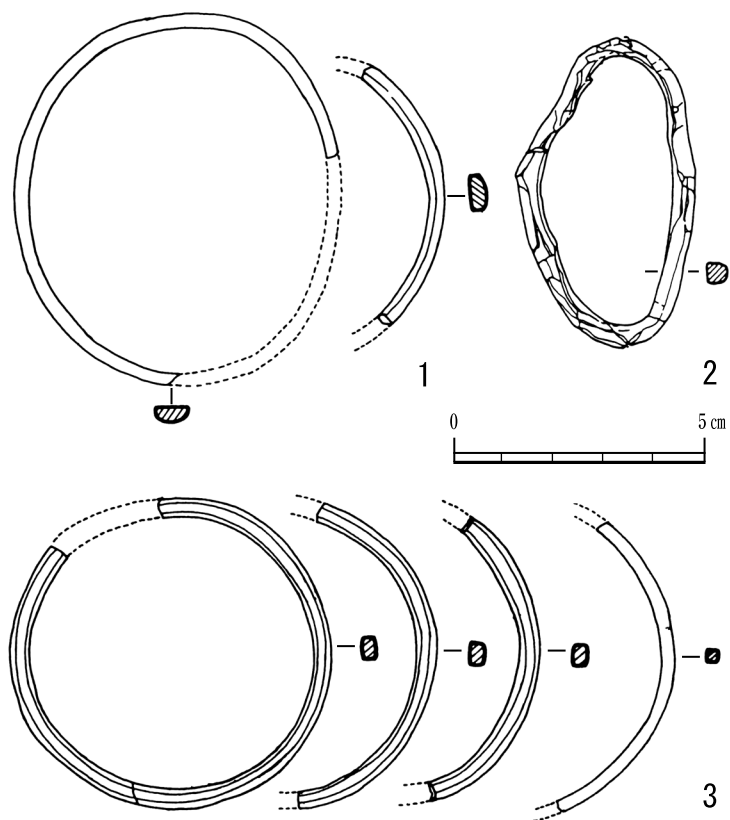
この円環形銅釧の形態とその系譜について、小田（1984）と安藤（2003）が分析を加えている。

小田（1984）は西日本と朝鮮半島の遺物を集成・分類し、その系譜について考察している。その中で、これら弥生銅釧を朝鮮半島から出土した釧と比較検討し、その大半を楽浪系銅環に系譜をたどり、朝鮮半島南部を経由して搬入された品としている（図4）。一方、前期末の福岡県カルメル修道院内銅釧や中期の福岡県須玖岡本の銅釧（図5）は、楕円形であることを述べ、円環形銅釧との違いを指摘している。この他国産と考えられる銅釧⁸や、楽浪系を祖形とし国内で作られた銅釧



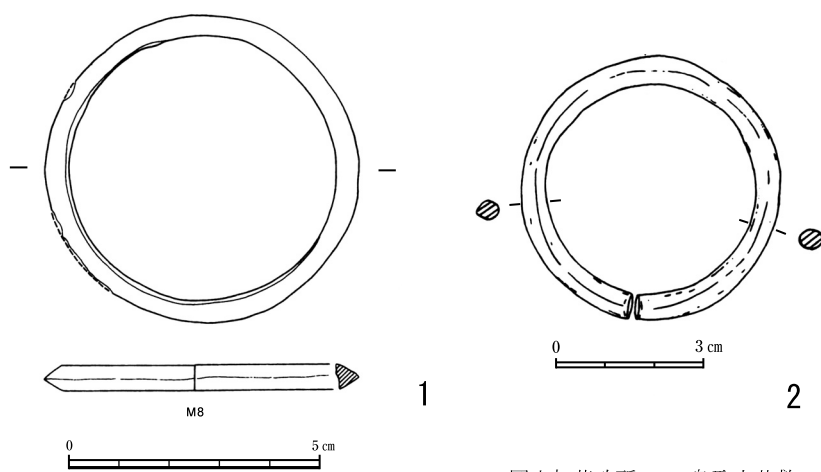
1・2：塔ノ首3号石棺、3：ガヤノキB地点

図4 対馬出土の円環形銅釧



1：須玖岡本、2：カルメル修道院内、3：宇木汲田

図5 北部九州出土の円環形銅釦



1：岡山加茂政所、2：鳥取土井敷

図6 鳥取・岡山出土の円環形銅釦

の問題については今後の検討とするとしている。

また小田はこれら円環形銅釧を、環外径・身幅・断面形で大別している。環外径の大きさで大型（径6～8cm）と中・小型（3.8～6cm）に大別し、身幅により太身（0.6～0.8cm）・中細（0.4～0.6cm）・細身（0.2～0.3cm）の三種を設定している。断面形では円形・楕円形・方形・長方形・菱形の五形式に識別している（小田1984）。

安藤（2003）は円環形銅釧の祖形は中国の初期青銅器から見られる銅環にあり⁹、それが朝鮮半島を経て北部九州に伝わった可能性は高いとし、対馬を中心に見られる後期の遺物に関しては、朝鮮半島製のものに酷似し、中期以前の円環形銅釧とは明らかに形態・法量が異なるもので、楽浪郡一带を含む朝鮮半島からの搬入品の可能性が高いだろうとしている。一方で、中期以前の円環形銅釧はそれらと異なる系譜を持つ可能性がある、と指摘している。

安藤によると、北部九州から出土する中期以前の円環型銅釧は、内側に面を持つ断面蒲鉾形、或いは方形のやや細身のものが多く、中期になると前期末のもの比べると細身化が進み、外径6cm前後とやや小型化する傾向があり、また断面が四角形のものも見られる（図5）。一方中期後半になると、近畿地方における出土例が増加するが、これらの多くは6cm前後の環径と内側に面を持つ断面形が共通しているものである。後期になると、断面形・法量ともに中期と類似したものが各地に散見されるが、数が減少し、時期も後期前半に収まるものが多い（図6）。一方対馬では後期前半から終末期にかけて銅釧の出土が集中する様相を示す（図4）。特に大阪府鬼鹿川遺跡から中期後半にさかのぼる円環形銅釧の鋳型¹⁰が出土している点から、遅くとも中期後半には、近畿地方を含む複数の地域で円環形銅釧の製作が行われていたことになる、と述べている。

これら前期末から後期前半に見られる、列島製の可能性のある円環形銅釧は、直径が6cm前後で、幅0.5前後と非常に細身である点特徴的である。またその断面は、内側に面を持つ断面蒲鉾形や方形が多いようであるが、中期から後期前半にかけて円形や三角形のものも見られ、断面形についてはかなりのバラエティがあるといえよう（図5・6）。

2) 西谷タイプのガラス釧との比較

西谷タイプのガラス釧は、後期後葉の遺物と考えられる出土なので、まず後期に出土した円環形銅釧を中心とする小田の分類から検討したい。

西谷タイプの環外径の大きさでは、小田分類では大型にあたり、身幅は太身かそれ以上である。これは腕輪の法量として分類から逸脱するものではない。しかし断面形を見ると、内側が平らであるが外は丸く膨らむという、すなわちD字形に対応するものは無く、この点において異なっている。

一方、前期末から後期前葉までみられる、列島産も想定されている円環形銅釧との比較を行いたい。このタイプの銅釧で、まず問題となるのは環外径の大きさと身幅であろう。この銅釧は身幅が細いのが特徴で、環外径も6cm前後と、西谷タイプのガラス釧とその外径・身幅ともに相違がある。また時代的にも分布の中心が中期であり、後期前葉を過ぎると見られないという点も問題であろう。

一方断面形は蒲鉾形のものがあり、断面形に関しては西谷タイプと近いものがあるといえる。

以上を鑑みると、後期に見られる搬入品銅釧とは断面形が異なり、一方で中期を中心に見られる銅釧とは、大きさと身幅が異なり、そして時期に関して問題があると考えられる。いずれにしてもガラス釧の系譜を、円環形銅釧に直接たどろうとすると、問題が残ると言わざるを得ない。

さらに最も大きな問題は、これら円環形銅釧が鑄造による製作であり、一方西谷タイプのガラス釧は鑄造による製作ではないという点である。もし鑄造製品であるならば、銅釧の鑄造技術を応用して製作したと考えられ、列島製の可能性も考慮に入れる必要がある。しかしこのタイプのガラス釧は巻き付け技法で製作されており、これは鑄造と異なる技術で、当時の列島のガラス加工技術を超えるものと考えられる¹¹。

以上、断面形や法量の差異及びその製作技術の問題から、西谷タイプのガラス釧は列島における製作を想定できず、搬入品と考えることが妥当であろう。

一方鑄造技法によって製作されている大風呂南タイプについては、技術的に製作できた可能性は否定できない。しかし形態的に弥生の釧とは乖離しており、その系譜が列島内で追うことができないことから、このタイプもまた搬入品と考えられる。

以上、これら2タイプのガラス釧がいずれも列島外で製作され、搬入された品であることが検証されたのではないと思う。その製作地については、またいずれ詳細に検討したい¹²。

6. ガラス釧を出土した墳墓とその副葬背景

筑前の二塚遺跡甕棺墓、出雲の西谷2号墓、丹後の大風呂南1号墓・比丘尼屋敷墳墓の4遺跡はすべて後期後葉の墳墓であり、ガラス釧は副葬品として埋葬されている（比丘尼屋敷は出土時の詳細不明）。3地域いずれも日本海に面し、交通の要所であった点が共通している。弥生後期において北部九州や西日本の日本海側では、主に墳墓に伴う副葬品としてガラス製品が多数見られており、その大半はガラス勾玉・管玉・小玉であった。

まずこれらガラス釧が副葬された墳墓の特徴や、共伴遺物、釧の副葬状況などを検討したい。

1) 各墳墓の特徴と釧の出土状況

①二塚遺跡甕棺墓

筑前の長野川中流域の台地上で発見された甕棺墓である。単独で埋葬されたと考えられ、長野川流域を支配していた首長の墓と目されている（伊都歴史資料館 1998）。共伴遺物はガラス管玉9点・ガラス小玉39点で、白色に風化していた。これらガラス玉は分析されていないが、ガラス釧と同様の風化の状態から、少なくとも鉛珪酸塩ガラス系のガラスであると思われる。釧と共に列島外から入手したのだろう。しかしこの甕棺墓には銅鏡は副葬されておらず、地域の首長ではあるがその傑出性は同じく後期後葉に比定される平原1号墓などに比べ低い。

北部九州は、貝釧や銅釧は非常に多く見られる副葬品であり、弥生後期までの甕棺に副葬された貝輪や銅釧の事例を見ると、着装例などがあり、腕輪としての使用・副葬方法が一般的である。このガラス釧もその副葬方法はおそらく着装と考えられ、北部九州の釧を副葬する風習の中で考えて問題ないと思われる。

②西谷 2 号墓

出雲の簸川平野に営まれた西谷墳墓群の中核をなし、突出部を含めると 1 辺 50m になる大型の四隅突出型墳丘墓で、同じく大型の四隅突出型墳丘墓である西谷 3 号墓に続けて営まれたと考えられている。西谷 3 号墓は墳丘上の中心主体 2 基に多数のガラス管玉・小玉と鉄剣が副葬されており、出雲地域において突出した副葬状況にある。その規模と副葬品の多寡から、これら二つの墳丘墓に葬られた人物は地域の首長であると目されている。

2 号墓は攪乱がひどく、主体部をはっきりと確認できなかった。ガラス釧は F4 グリッドの土器が集中して出土する付近から出土した。中心主体に伴う遺物と考えられ、朱が付着している点からも棺内にあったと考えられる（出雲市教育委員会 2006）。残された遺物からガラス管玉が相伴していたことが判明しているが、副葬状態などは不明である。西谷 3 号墓における玉類など装飾品の副葬方法を検討すると、第 1・4 主体ともにガラス管玉を首飾りとして使用している。また第 1 主体はその他に、ガラス勾玉・ガラス小玉・石製管玉を数珠状に束ねて頭部の脇に添える、という珍しい副葬方法をとっていた。ガラス製・銅製を問わず釧は発見されていない。これから鑑みると、西谷 2 号墓でもガラス管玉は首飾りであった可能性が高い。しかし釧は着装であったか、添えられてあったかは不明である。

山陰地域において弥生時代の墳墓から出土する副葬品は多く無く、大半が石製管玉である。これら管玉は、副葬状態がわかる出土例では多くが首飾りとしての着装例が観察され¹³、この地域の主な副葬方法として首飾りとしての着装が挙げられる（小寺 2006b）。釧については、特に出雲地域においては銅釧の出土はなく、貝釧は極 1 例（猪目洞窟）の出土があるのみである¹⁴。また丹後などでよく見られる、腕輪と判断される状態のガラス小玉の副葬も存在しない。

このように、出雲地域を中心に山陰では西谷 2 号墓のガラス釧はその存在のみならず、その素材が何であれ釧の副葬自体が非常に珍しいものであるといえる。

③比丘尼屋敷墳墓

丹後の竹野川中流域の墳墓である。しかしこの墳墓の詳細は不明であり、またガラス釧の出土状況も不明である。

④大風呂南 1 号墓

丹後の野田川河口に位置する大型の台状墓である。1 号墓第 1 主体は後期後葉に比定される。第

1 主体は 1 号墓の中心主体で、墓壇は長さ 7.3m・幅 4.3m を測り、また舟底状木棺は長辺 4.3m・短辺 3.7m を測り、墓壇・木棺ともに非常に大型であった。ガラス釧は棺内から出土し、そのほか鉄剣 11 振・鉄鏃 4 点・有鈎銅釧 13 点・貝輪 1 点・緑色凝灰岩製管玉 272 点・ガラス管玉 10 点・ヤス他鉄製漁労具などが共伴した（岩滝町教育委員会 2000）。墳墓の規模のみならず、その副葬品の量と格の高さからも被葬者はこの時期を代表する大首長の一人と考えられている。

玉類や釧の副葬方法は多彩である。玉類の一部、ガラス勾玉と石製管玉の一部は朱がもっとも厚く堆積する範囲に集中して出土しており、これは着装の可能性が考えられる。また石製管玉を多数広範囲にばら撒いており、何らかの儀礼が想定される¹⁵。ガラス釧はこれらとは異なり、胸部中央付近のやや下寄りと考えられる位置から出土した。北近畿の弥生後期の墳墓においてガラス小玉を手玉として使用した例を見てみると、これらガラス小玉は体の側部と思われる位置から出土している。すなわちこの時期の北近畿における埋葬姿勢は身体の側面に手を伸ばす形であった可能性が高い。これを鑑みると大風呂南のガラス釧は着装ではなく、むしろ胸部の飾りのような状態で置かれた可能性が高いと考えられる¹⁶。

また有鈎銅釧はゴホウラ製立岩型を祖形とする有鈎銅釧の一種と考えられる。九州以外では貝輪系銅釧の多くは集落遺跡からの出土で、これは珍しい例であり、丹後地域で出土した遺物はこれ一例のみである。またその副葬方法も特殊で、着装ではなく、被葬者頭部上側で木棺小口との間に置かれ、布の付着痕から布に巻かれて埋葬されていたと考えられている。いずれも、釧が着装でない状態で出土しているといえよう。

2) ガラス釧副葬の背景

以上、ガラス釧が副葬された墳墓の全体図や、またその副葬の状況を墳墓毎に検討した。これら墳墓のデータ、各地域の副葬品目やその選択を背景に、副葬品としてのガラス釧の入手経路やその副葬された背景などを考察する。

北部九州では、弥生中期後葉から後期にかけて多数のガラス製玉類が副葬されている。しかし弥生中期後葉のガラス製品（勾玉・管玉）に見出せるような政治性の高さは、弥生後期においては見られなくなっている（小寺 2006a）。その威儀品としての重要性の低下は、ガラス釧についても反映されているのではないだろうか。この墳墓の傑出性は平原 1 号墓などに比べると劣るという点は既に述べたところである。北部九州では他の墓からガラス釧は発見されておらず、性急な判断をすることはできないが、この地域のガラス釧とその所有者については、次に述べる他地域で見られるほどの重要性は感じられない。またこの甕棺墓の被葬者の格がそれほど高くないということは、被葬者自身が当地域の首長層を代表して、列島外からこれらガラス釧を入手できる立場であったかは疑わしい。おそらく他の傑出した首長を通じて入手したガラス釧を、この地域の釧を着葬する風習にのっとなって使用したのであろう。

一方山陰では後期中葉から後葉において、特に地域の有力な首長と考えられる墓からはガラス管

玉が出土しており（西谷3号墓・宮内1号墳丘墓など）、他の平均的な首長墓においては石製管玉が副葬されている。この地域におけるガラス製品の威儀品としての地位の高さは最高ランクにあると考えられる状況を呈する（小寺2006a）。それに加えてガラス釧の希少性はきわめて高いものであったらう。銅釧を副葬する風習の存在がみられない状況を考えると、ガラス釧を副葬された西谷2号墓の被葬者の特殊性、傑出性がより際立つと言えるのではないだろうか。

また西谷2号墓から出土したガラス管玉は非常に珍しいソーダ石灰ガラスであり、筆者の集成によると、弥生時代では西谷3号墓でのみ発見されているものである（小寺2006a）。さらに西谷3号墓出土のガラス小玉とガラス勾玉は非常に特殊な形態をしており、これもまた他地域で見られないものである¹⁷。このように西谷3号墓のガラス製品の他にみられない特殊性も考慮すると、これらガラス釧をふくめたガラス製品を、列島外とこの被葬者達との直接的な交渉によって入手した可能性は高い。ガラス釧は列島外との直接的な交渉を示すものであり、それを副葬するという行為はこの首長の力の強さを示すものであったらう。

同様の様相を示すのが丹後である。北近畿では後期に副葬品が急増し、その中心は鉄製品と玉類、特にガラス製玉類と石製管玉である。釧は副葬品に見られないが、ガラス小玉を連ね、腕輪（手玉）として着装状態で出土した例は少なくない¹⁸。そのガラス製品に与える政治性の高さや、副葬における規格性の創出、またこれらガラス製品を大陸から直接入手していたであろう、といった検証は既に拙稿（小寺2006a）でおこなった。この時期この地域におけるガラス製品の威儀品としての地位の高さ、政治性は際立ったものであることは間違いない。むしろそれはガラス釧についても同様であったと考えられる。この地域では大陸から直接ガラス製品を入手している可能性が高いという点は、筆者を含め以前から指摘されているところであるが（野島2000・小寺2006a）、ガラス釧もまた大陸との直接交渉のなかで入手したものであろう。

また大風呂南1号墓出土のガラス釧の出土位置についてであるが、釧というよりむしろ胸部の飾りというような状況であったという点はすでに述べた。この体の中央部に円環形の飾りを配するという副葬方法は、中国の同時代の墳墓に見られる佩玉（ギョク）をまさしく想起させる。丹後地域を中心とした墳墓に見られる、頭部に集中した玉の副葬方法¹⁹は、中国の葬玉の影響を受けたのではないかという問題を以前拙稿（小寺2006b）において検討した。このように既に大陸地域の葬制の観念を受容していたという状況が、その副葬の背景にあった可能性は高い。大風呂南から出土したガラス釧の形状は、当時の弥生人が考える釧という形状から逸脱しており、釧ではなく異なる機能をもつ製品＝佩玉として受容され、大陸の葬制を模して副葬したのではないだろうか。もしくは、初めからその意図を持って入手した可能性も考えられる。すなわち、大風呂南1号墓のこの遺物は、現在「釧」として扱われているが、「佩玉」的なものとして考えたほうがより良いかもしれない。

大風呂南1号墓の被葬者は、搬入されたガラス釧を佩玉として先進国たる中国の葬制にのっとりて使用する一方で、搬入されたガラス製品を改鑄し製作したガラス勾玉を、この丹後地域独自の方法で副葬している（小寺2006a）。そこには、先進国への憧憬や、葬送時における大陸とのつなが

り＝被葬者の権力の強調、さらにこの地域の独自性の発露といった様々な様相をみることができるのではないだろうか。

以上、ガラスを副葬された墳墓やその副葬状況を検討した。それぞれの特徴はあるものの、丹後・出雲地域での首長の傑出性の高さ以外はあまり共通点を持たず、それぞれの地域の中で独自の価値を持って副葬された状況が垣間見えるものとなった。

ガラス釧はその地域の代表的な首長に副葬されたと考えられるが、しかしその首長の傑出性は北部九州ではやや低く、出雲・丹後では逆に非常に高いと考えられる。それはすなわち、当該地域でのガラス製品の威儀品としての傑出性やその意義にもつながるものである。

これらガラス釧の入手経路を考えると、どこか一箇所の首長が入手し、分配したと考えることは困難である。特に大風呂南1号墓や西谷2号墓の首長は、独自に入手し、そして各々の社会的需要に即して使用していた可能性が高いといえよう。

特にその使用方法については、西谷タイプはガラス釧として認識され、使用された可能性が高い一方、大風呂南タイプは釧として使用されたのではなく、むしろ「佩玉」的な扱いで使用された可能性が浮上してきた。最初からそれを意識してこのガラス釧を入手したのか、それとも結果的にそのような扱いとなったのか。これについては不明である。この点については、他の遺物の出土例を待って結論を出すべきであろう。

まとめ

以上、これまで出土したガラス釧を検討し、大きく二系統に分類した。またそれらが国内の釧の系譜を引いておらず、国外で作られた搬入品であることを示した。そして、それらガラス釧が埋葬された墳墓やその埋葬状況を検討し、それぞれ被葬者たる首長達が独自に入手したこと、特に出雲と丹後の首長は独自に国外から入手した可能性が高いことなどを考察した。さらに大風呂南1号墓の首長については、そのような大陸との交渉を通じて、大陸地域の葬制の観念を受容し、自らの葬送に反映させた可能性を指摘することとなった。この時期の、特に日本海側において、独自の力をもって意識的に大陸と交渉をする大首長の姿がさらに鮮明になってきたのではないだろうか。

次稿では、これらガラス釧の製作地に付いて検討したいと考えている。

謝辞

大風呂南1号墓のガラス釧の観察を許可してくださいました京都府岩滝町（現与謝野町）教育委員会と京都府立丹後郷土資料館の皆さま、また西谷2号墓のガラス釧の観察を許可してくださいました島根県出雲市教育委員会の皆さまに謹んで御礼申し上げます。

註

- 1 筆者はガラス管玉と勾玉の使用やその背景に関して考察を行っている（小寺 2006a）。
- 2 弥生時代においては珪酸と溶融剤という原材料からガラスそのものをつくるという一次製作は行われていない。列島内で行われたのは、二次的な製作である改鑄のみである。
- 3 遺物の状態は非常に悪く、純粹に観察から製作技法は決定できない。銅釧との関連を推定し、銅釧と同様の鑄造による製作技法と考えたのだろう。
- 4 図3-4の破片はいびつな形状であるが、これも侵食によるもので、本来は断面D形と思われる。
- 5 また接着後さらに側面の形態を整える工程を経る場合も見られる。これにより断面形はD字や三角などに加工することが可能である。
- 6 アジア地域のガラス腕輪の遺物でも傾きが観察されるものもあり、また民俗事例（インド）では実際に円錐状の筒型も報告されている。
- 7 このタイプの銅釧は前期末より出現しており、時期的に楽浪郡設置以前であり、その呼称が正しくないと指摘されている（安藤 2003）。ここでは円環形銅釧と呼称する。
- 8 小田が論文を執筆した時点で、近畿からの円環形銅釧は鬼虎川の鑄型以外出土していなかった。
- 9 列島製円環形銅釧の祖形については、縄文系木製腕輪をあげる論もある（小田 1984）。
- 10 この鬼虎川の鑄型は中期の円環形銅釧に近い外径をもつが断面形が太く、その製品と思われるものはこれまでのところ出土していない。特にその断面形については、小田（1984）が仕上げ後の形態は円形か楕円形ではないかと指摘している。
- 11 繰り返しになるが、弥生時代においては原材料からガラスを製作するのと同程度の高温を必要とする、溶融したガラスからの製品製作という技術は存在していないと考えられる。この当時可能であったガラス加工技術は、搬入品のガラスを鑄型などを使用して改鑄して製作する、いわゆる鑄造加工である（現在確認されている弥生の列島産鑄造ガラス製品は大半が片面鑄型により鑄造された勾玉であり、また同様に鑄造製作された管玉がごく少数存在する）。一方ガラス釧の巻き作り技法は、高温の炉と坩堝を使用し、溶融したガラスを引き伸ばして製作するより高度な技法である。
- 12 大風呂南1号墓タイプと似た組成かつ似た形態のガラス遺物が、中国南部とベトナム北部にかけての漢代併行時期の遺跡から出土している。一方、西谷タイプと同様の形態をもつガラス腕輪は、同じく漢代併行期のベトナム南部から南アジアにかけて出土しているが、その組成がアルカリ珪酸塩ガラスと、成分が異なっており、高鉛ガラスの腕輪が出土した例は現在のところ見られていない。
- 13 西谷2・3号墓、宮内1号第1・3主体、湯坂1号墳SX-4主体他。
- 14 貝製の釧は分解されやすく実際の副葬の量は不明。
- 15 これら葬送時における玉の副葬方法と儀礼について、筆者は考察を行っている（小寺 2006b）。
- 16 なお、このガラス釧が副葬された被葬者は成人男性であると推定されているが、ガラス釧の形態は、成人男性の手を通すには径が小さく、成人女性でも難しいという点を指摘しておく。
- 17 ガラス小玉は円形だけでなく、涙形の特殊な形態をしており、またガラス勾玉は他の地域で見られない西谷Mタイプ（小寺 2006a）で、いずれも類例が見られない。
- 18 左坂墳墓群・三坂神社墳墓群など。玉類の副葬の配置について拙稿（小寺 2006b）で論じている。ガラス小玉を連ねた腕輪は、北部九州や北近畿に弥生後期に見られ、特に北近畿に多い。
- 19 三坂3号墓第4・9主体他・坂野丘第2主体・日吉ヶ丘SZ01他多数。

〈参考文献〉

- 安藤弘道 2003 「弥生・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観 6』小学館, 291-306
 伊都歴史資料館 1998 「伊都国発掘'98 王がいた証」
 井上洋一 1989 「銅釧」『季刊考古学』27: 56-59 雄山閣
 岩滝町教育委員会 2000 『大風呂南墳墓群』

小寺 智津子

- 岩永省三 1997 「弥生時代の装身具」『日本の美術』370 至文堂, 62-75
- 岡山県教育委員会他 1999 『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 138
- 小田富士雄 1984 「弥生時代円環型銅釦考」『古文化談叢』13 : 103-132
- 木下尚子 1982 「貝輪と銅釦」『未盧国』六興出版, 424-445
- 肥塚隆保 2009 「日本出土の古代ガラス—素材とその歴史の変遷」GLASS53 : 3-9
- 小寺智津子 2006a 「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」『古文化論叢』55 : 47-79
- 2006b 「弥生時代の副葬に見られる玉類の呪的使用とその背景」『死生学研究』2006 年秋号 : 163-196
- 島根県出雲市教育委員会 2006 『西谷墳墓群』
- 野島 永 2000 「弥生時代の対外交易と流通」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊 10, 雄山閣, 29-38
- 林巳奈夫 1999 『中国古玉器総説』吉川弘文館
- 藤田等 1994 『弥生時代ガラスの研究—考古学的方法—』名著出版
- 北條芳隆 2005 「螺旋状銅釦と帯状銅釦」待兼山考古学論集, 大阪大学考古学研究室, 247-266
- 山崎一雄 1987 『古文化財の科学』思文閣出版

〈図・データの出典〉

- 図 1 藤田 1994
- 図 2 島根県出雲市教育委員会 2006
- 図 3 岩滝町教育委員会 2000
- 図 4・5 小田 1984
- 図 6 - 1 小田 1984
- 図 6 - 2 岡山県教育委員会他 1999

A Study of the Glass Bracelet in the Yayoi Period

KOTERA Chizuko

In Yayoi Societies, glass artifacts were used as prestige goods in political contexts rather than just as ornaments. This study examines glass artifacts to approach Yayoi societies. All the raw materials of glass artifacts were imported from abroad, and widely distributed through trade in Asia as luxury goods at that time. This allows us to understand international exchange by examining glass artifacts.

This paper presents a detailed typological analysis of glass bracelets. Based on the observation of the glass bracelets, I first classify them into two groups: *Nishitani* type and *Oburo-minami* type. Then I compare them with bronze bracelets of the Yayoi period to identify the production area of the glass bracelets. The results suggest that the both types were not produced in Japan, but were probably imported from abroad. Second, I examine the characteristics and contexts of each mound tomb, from which bracelets were excavated to discuss how the glass bracelets were imported and what sociopolitical background was relevant.

Consequently, this research suggests that the glass bracelets were buried with local value in each region. Especially in *Izumo* and *Tango* region, chiefs of the Yayoi period buried with glass bracelets were quite distinguished. The glass bracelets were important as prestige goods in these areas, and each chief possibly acquired them individually from abroad. Moreover, it seems that *Nishitani* type glass bracelets were buried as bracelets, while *Oburo-minami* type was buried with an intention to represent Chinese ornament set of jade. Based on these considerations, I conclude that *Tango* region was quite distinguished from the other areas in Yayoi period. The tight relationship between *Tango* region and abroad is emphasized.

Further research is necessary to identify the production areas and the distribution routes of the glass bracelets in ancient Asia.